加茂里山通信（かもさとやまつうしん）

平成２７年
新年号

発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部

編集長　征矢貫造

里山の魅力を発信！

自然養鶏農場 つねいずみファーム

富山地区の吉沢入口にある卵直売所つねいづみファーム。駐車場に入るやいなや元気な鶏の鳴き声の洗礼を受ける。自然養鶏農場として、直売所の裏側にニワトリが種類ごとに飼育されていた。種類としては、島骨鶏、黒鳥、アローカナと１０００羽程が外敵からしっかりと守られた状態でのびのびと歩き回っている。農産物と卵直売所の中では、ご主人と奥様が２人で切り盛りしていた。当初から気になっていた女性に人気の美容と健康に良いと言われている青い卵のアローカナと島骨鶏と黒鳥の卵は、産卵率が本当に低く、普通の鶏が１年間３６５日×８０％と考えると、半分ほどの産卵率になってしまい、希少価値の高い卵だと感じられた。その卵がパックとなって、いろいろな食材とともに販売されている。卵以外の食材は、地元の方々との連携で野菜類や漬物、山で採れた自然薯等々もあった。ゴルフ帰りのお客さんの中にも大勢リピーターがいるようで、黒にんにくが気に入ったのでまた買いに来たというお客さんに遭遇。多くの野菜を購入するのも、料理方法を販売所の奥様に聞くのも楽しそうだった。

鶏はこの販売所の裏手に

直売所の中からも鶏小屋を見ることができたが、相当警戒心が強いので、近づいて写真を撮る事が難しいと聞いていた。ご主人に頼み消毒を施し、逃げ出すギリギリまで近づいた。子供の頃の鶏を追い回した時の記憶が蘇る。捕まえる事が出来るはずもないのに、ゆっくりと近づいていくと一瞬こちらを見て、バタバタと逃げていく。４０年前は、放し飼いだったなと今になって思う。

ご主人の今気がかりなことは、農作物の生産者の高齢化が進み、次なる担い手がいないことだという。農産物も１００％富山地区の生産品とはいかず、他の地域の方々の品もある。商売をする人がメッキリ減ってしまった富山地区。圏央道が出来て便利になった分期待が大きくなっていく。目の離せない直売所となっていく事は間違いないだろう。

（矢代里山通信員）

鶏たちのほんの一部

第四一回市原高滝湖マラソン 新春に駆ける！

全く雲のない最高の天気の下、第４１回市原高滝湖マラソンが開催されました。２４００人余りが新春の高滝湖周辺を駆け抜けました。トップを競う者、自分の記録更新に挑む者、参加して走ることを楽しむ者、参加の仕方はいろいろの様ですが、ゴールを超えたところで見ることのできる、上気した顔に宿る達成感のような表情がそれぞれの参加の意義を語っているようでした。

この大会に限ったことではないでしょうが、大会に参加する人以上に目につくのは競技関係者です。駐車場の案内をする者、コースに立つ者、救護に備える者、記録に関わる者、警備に関わる者、選手や見学者に無料で椎茸スープや甘酒を配るために早くからスタンバイする者、もちろん号砲を鳴らす人まで、実にたくさんの人が関わり、このマラソン大会が成り立っていることが周辺を歩いてみるとわかります。駐車場は加茂中学校にまで用意され、そこにも詰めている人もいました。そして高滝駅では普段ではとても考えられないようなたくさんの人が降り、臨時の駅員数名と臨時の改札口、それに小湊鉄道のグッズ販売まで行っていたり、さらに着ぐるみの「ケロちゃん」まで登場。小学校の校庭もラーメンから串豚焼きや、大判焼きなどの飲食を扱う出店から野菜の産直があったりしてにぎやかです。これも毎年の光景ですが、今年も大会の盛り上げに一役買っていました。

やはりゴールは格別！

愛嬌ふりまくケロちゃん

（征矢里山通信員）

加茂の初夢 加茂芸術村プロジェクト３

昨年の「いちはらアートミックス」はいくつもの課題を残しました。訪れる人が少なかったというのはその中でも大きな課題で、宣伝、広報、受け入れの姿勢、全体をプロデュースする人間の不在、など様々な要因が考えられますが、油断はなかったかと思っています。越後妻有の大地の芸術祭や瀬戸内の国際芸術祭に比べ、首都圏からのアクセスの良さという点で、東京からこれだけ近いのだから人はいっぱい来るだろう、という一種の楽観がなかったか。まだ始まる前に、関係者の何人かが「新潟の奥の方にあれだけ人が行くのであれば、都心からすぐの市原の芸術祭には黙っていてもたくさんの人が来るだろう。２０万と言っているけど、下手すりゃ１００万くらい来るんじゃないか」という趣旨のことを言っていたのを覚えています。恐らくはそういう楽観は結構の人が持っていたのではないかと思えます。結果はともあれアートミックスが開催され、色々な芸術家がやってきて地元の人間と関わり、あるいは参加を促し、そこに付き合いが生まれました。準備段階からサポーターとして参加して、何に使われるのかどんな風になるのかも想像できない中で、蔓を集めたり、プールのヘドロをかき出したり、竹や木を伐採した人もいます。生まれて初めて芝居に参加した人もいました。見るに見かねて本気になって世話を焼いた人も何人か知っています。あの期間、この地域は一種の芸術村になっていた気がします。もちろん中には快く思わない人や、全くの無関心な人がいたのも事実です。しかし、２０１４年の春に加茂地区を中心にして国際的な芸術祭が行われたという事実は、なんらかの形で参加した・しないに関わらず、記憶としてこの地域の人に刻まれました。

前回の初夢『芸術村プロジェクト　２』で、若く才能のある作家たちの発表の場として、廃校になった学校などを提供してはどうか書きました。また、発表の場を提供することで、都心から人を呼ぶようにしたらとも書きました。考えは全く変わっていません。発表の場は学校跡地だけとは限らないでしょう。冬場使わないたんぼや耕作放棄地など、その気になれば個人的にも提供可能でしょう。芸術作品は美術館で見るものだという既成概念を見事に覆してみせたのは先のアートミックスの大きな成果と考えます。どこでも発表の場になるということを自分たちの目の前で示してくれた芸術祭でした。湖畔美術館もこれまでになかった色々な企画を進行させています。美術館を一つの核として加茂地区全体で色々な企画展を常設していったら、この地域のことに関心のなかった人たちにも徐々に認識していってもらえるのじゃないか、そう考えます。

宮部みゆきの「小暮写真館」の表紙の飯給駅の写真が桜の咲く頃に多くのカメラマンを呼び、市原高滝湖マラソンには遠く県外からも人がやってくる。紅葉や新緑の時期のハイキングにも多くの人が参加する。田んぼアートの案山子（かかし）のコンテストを実施して多くの人を集めている地域もあります。奈良県明日香村、熊本県玉名、高知県土佐山田町、長野県飯田市千代など。明日香村は彼岸花も多く植えられ案山子を訪ね歩くようになっています。

そういうことも含め、場所を提供するなり自分たちで企画するなりして少しづつやっていったら、いつかはそれが大きく育つ可能性があります。どんどん過疎化が進んでいる加茂地区に多くの人を呼び込むための工夫が必要です。加茂芸術村プロジェクトは夢ではなくなるかもしれません。

（征矢里山通信員）

初夢の炭焼

あちらこちらで白い煙が上がっている。炭焼き小屋が再生されている。管理するのが難しい竹林をどうしたらいいものかと思案した結果だった。年配の方が多いこの土地では、まだ炭焼きの経験をしたことのある諸先輩が多い。土壁と耐火煉瓦を使ったしっかりした炭焼きやドラム缶等を使ったちょっと近代的な炭焼き、土手に穴を掘って作った炭焼きといろいろな手法を模索している。ソーラーパネルだけだという近代化の波に逆行して、昔ながらのエネルギーを使って生活してみたくなった。囲炉裏端を庭に造り、持ち寄った材料で酒盛りをする。寄り合っては、自分が作った物を披露して意見を聞く。木炭検査員という方がいらっしゃったというを聞いたが、今ではどうしているのだろうか？それほど炭焼きという職が多かったのだろうか。今も都市ガスではなく、プロパンガスを使用している地域なだけに気になる職業になっている。この季節の暖を取る方法の見直しとしては、田舎ならではのことかもしれない。炭化したものをアートとするために、いろいろな趣向を凝らし、先陣の知恵者達の話を聞くのもたのしい。

（矢代里山通信員）

里山からの発信

時代は加速する

今スマートフォンに聞きたいことを話しかけると即座に反応する。また、グーグルのような検索エンジンにたとえば「アイフン6」と入れると「もしかしてアイフォン6のことでは？」と間違いを指摘してくれる。一昔前の携帯電話では考えられないような進化をしている。正月に放送されたNHK特集の30年後の未来では端末がその日に起こることを高い確率で予測し、行動を指示する。あらゆるものに取り付けられたICチップにより膨大な情報が集められ、分析類別化され、起こりうる出来事をコンピューターや端末が随時予測する。先の例はすでにそういうことが始まりつつあるのだと予感させる。マザーコンピューターが自らの存在を守るために暴走を始めるというのは、「2001年宇宙の旅」や「ターミネーター」の未来世界でのことだった。今のコンピューターがどんどん進化し量子コンピューターの時代を迎え、さらに加速度的に進化して行った先はどうなるのか、空恐ろしいほどだがそう遠い先の話ではない事がさらに拍車をかける。車は今、水素を燃料とする排出するものが水だけという究極のものになりつつある。（しかし、水素を作り出し閉じ込めるのにエネルギーを使う。電気自動車もしかりで電気を作り出すのにエネルギーを使っている。しかしながら車自体の排気ガスは出ない。）トヨタの「ミライ」は夢を形にしてしまった。また、ぶつかる危険を車が察知して自動的に止まるというシステムもどんどん取り入れられるようになっている。ともに10年前には実用化するのだろうかと考えられたものだ。いつか、行き先を告げたら自分が運転せずに車が自動運転して連れて行ってくれるような時が来そうだ。テレビもデジタルの時代となり、薄く大きくなり、プラズマや液晶からLEDへと変わり、4Kの時代へ、そして8Kの時代へと進むであろうし、番組にしてもBSの時代の到来とともに多チャンネル化した。

作家の立花隆が「今は人類の文明史上画期的な時代にいて、加速度的に進化している状況を目の当たりにしている」というようなことを40年くらい前に書いていた。当時のSF小説やSFの映画やドラマの中に登場したものがほとんど現実化して、事実はそれらを超えてきている。

すごい時代に今生きているのだと思う。

科学の進化は生活のスタイルも変えている。たとえば欲しいものをパソコンのネット上で探し購入する方が、出かけて行って探して買い物をするより圧倒的に時間を短縮できる。その恩恵は田舎にいるものほど受けることができる。たとえばパソコンソフトや電気製品をヨドバシ．ｃｏｍに夜中に発注しても次の日の午前中に配達されてくることがある。アマゾンや楽天でもそうだが品を比べることができ、値段を比べることができる。水道の混合栓もこの辺では売っていない美味しい吟醸酒や雪かき機も購入できる。また、振込みや振替、税金の支払いなどの銀行手続きもパソコン上でできる。わざわざ銀行に行かなくても家でパソコンを操作することで済んでしまう。田舎生活にこそ、あるいは車が運転できなかったり動けなかったりする者に取ってこそ、パソコンは必需品だと実感する。

変わったこと　変わらないこと

しかし、ひとたび自分たちのいるところ、周りを見渡せば、昔と変わらずに田んぼや畑があり、ダム湖があり、猪やタヌキやハクビシンがウロチョロしキジが鳴いている。昔ほどではないにしても少し濃いめの人間の付き合いもそう変わらない。

変わったことは何かといえば、子供をあまり見かけなくなったことだ。加茂中学校が今の平野に校舎ができて高滝、里見、白鳥、富山、月出校舎の生徒が集まった1967年に、ひとクラスが40人を超えて1学年6クラスあった。つまり1学年250人程度。昨年小中一貫校となった加茂学園に入学した小学校1年生は20人で12分の1以下となっている。将来何人がこの地に残るのかはわからないが、このままの数字では消防団はもちろんのこと、各町会すら成立しない状況になってしまう。人がいなくなるというのはそういうことだ。加茂地区の過疎化も加速度を増している。しかし、市原市が過疎の地かというとそういうわけではない。人口は徐々に増えてきている。そういう中で加茂地区の過疎化は市の差し迫った問題とはならないだろう。市原市の面積は広く町や村の人口からすれば多いが、地方行政の最小単位のひとつだからそうなるだろう。過疎化の問題に真剣に取り組み成果をあげているのは、小さな町や村で事の本質と将来をきちんと見据えているところだ。その一例は毎日新聞の1月1日号の1面トップに紹介されていた。信州最南端にある人口4000人の下条村だ。

（加茂地区の人口よりも少ない）村は資材のお金は出すが小規模の林道や農道は村民が舗装する。手当はなし。当初反発が相次いだが、やってみたら100mを半日で終え、その気になった。以来村民による舗装は1500箇所を超えている。節約したお金で若者向けの公営住宅を建てる狙いがあった。若い人間を呼び込むため、村営の賃貸住宅を建て家賃を相場の半額とし、医療費は高校まで無料にした。国の補助金が使えないため村費で建てた。この仕掛け人の伊藤村長は「人口を増やす」ことを一番の公約に掲げ当選し実践してきた。職員の危機意識のなさに、職員全員を交代で民間企業に送り込んだ。辞める者もいたが帰ってきた職員の目の色が変わっていた。数人でやっていた仕事を一人でやるようになり、職員は3分の2程度に減ったが村の基金残高は村の年間予算の倍以上の60億円となった。いま全国の自治体から視察に訪れ、その数は10年間で400前後にのぼるという。

かつて加茂村だった

かつて今の加茂地区は加茂村だった。加茂村の単位で物事を考えたら、この地域の今後のさらなる過疎化のもたらすものは相当に深刻と言える。危機感を持ってこれに誰が取り組むのか。加茂地区が一つの区のようにある程度の自治組織であったならと思うことがある。自分たちの地域のことを真剣に自分たちで考える。そうでなかったら過疎化は進行しただそれを嘆くだけになってしまう。

科学や環境が加速度的に進化し生活スタイルが変わって便利になっても、地域が崩壊してしまえば何にもならない。加茂地区の子供達の将来のために、今私たちにできることを真剣に考え、行動に移していかなければならないところに来ているのだと思う。

（征矢里山通信員）

加茂の保存食　ずいき

赤芽、八つ頭、ハス芋等の里芋の赤色の茎を「ずいき」と言います。皮をむいて干せば保存が効くため、一年中美味しい「ずいき」が食べられます。加茂地区でもお正月の雑煮には里芋が欠かせませんから、畑で里芋を作っている人も多くいます。天候に左右されますから、夏場に雨の少ないときは毎日畑に通って水を掛け、丹精込めて作ります。「なかなかふったたない」、「茎は立派だけど芋が大きくならない」と里芋談義が続きます。

ずいきはあくが強いため、皮をむくときは使い捨て手袋を付けないと、手が真っ黒になります。みそ汁で食べるには前の晩に皮をむいて茹でてから、みそで薄めに味をつけ一晩置きます。朝再び火にかけ、味をととのえれば出来上がり。酢の物は茹でてから甘酢に漬けます。時間がたつときれいなピンク色になります。

干しずいきは土を洗い流し、皮をむき紐で編んで干します。だいたい一週間でカラカラになったら、保存袋に入れて空気を抜き冷暗所で保存してください。使うときは、湯で戻し、湯を切り軽く絞り、油揚げと一緒に炒め煮にします。昔は干瓢の替りに甘辛く煮て、寿司の具として使ったそうです。

「雪が降って何にも無い日は、ずいきの煮たので混ぜ飯を作って食べた」「干したずいきを丸めて野球のボールにして遊んだ」こんな話も聞くことが出来ました。ひとつの食材で昔の情景を思い出すことができるんですね。季節の食材を使い保存や加工をして食卓に並べる知恵を大切にしたいと思います。

（大曽根R里山通信員）

上吉敷谷里山から

2014年初旬の雪で多くの被害があった上吉敷谷の里山。山小屋は傾き、通路も倒木で通行不可能な状態になってしまった。しかしそんな事を物ともしないメンバーの行動力。

重機なども使わずに、傾いた柱を元通りに復活させる知恵を持っている。倒木した木々もなんのその、チェンソーやのこぎり、斧で薪と化し、大木は橋の材料となる。

山小屋から見る風景は、全面真っ白な雪景色だったり、土手一面に咲く白や黄色の小さな水仙の花だったりする。夏にはホタルが見られる。ここに至る道はイノシシ等の獣たちとの共存のため、毎回補修をしなければいけない。しかし今年は様子が変わってきている。水路沿いを歩いていくルートがあったが、倒木、土手の崩壊等で復旧が危ぶまれた場所でも、けもの道がしっかり出来上がっていた。草を分け足場の悪くない場所を選んで、一本の道が形成されている。道路補修、橋の架け替え等はその場調達で行われて行くことだろう。

これからも地域内外の方々の協力を得て活動を続けていく事を、新年早々の作業活動で語り合った。

（矢代里山通信員）

NO MOSS と歌仲間募集！

問い合わせ
（株）音楽プロデューサー　NO MOSS
居酒屋
大ちゃん　2
TEL 090-2629-9600

こっもど紀行

地方消滅の時代か

中央公論社から2014年に発行された「地方消滅」という本を読んで、少なからずショックを受けました。二宮手県知事で、総務大臣まで勤められた増田寛也氏が編集著作されたベストセラーです。

なんと、このまま何もしなければ全国で896の市町村が消滅する可能性があるというではありませんか。平成の合併で全国の市町村は1800余りですから、約半数が対象になる計算です。計算の根拠は　出産可能な若年女性の人口減少が多いと推計される地域が消滅につながるという事になっていて、困ったことに人口推計の数字は結構正確だという事なのです。

さすがに市原市は消滅の対象になっていませんが、千葉県内のデータによると、若年女性の減少が大きい市町村は1位に栄町が入り、2位に長南町。7位に長柄町、12位には大多喜町がランクされました。なんと、加茂、南総に隣接する町が上位になっています。ということは市原市全体は消滅の可能性が薄いとしても、加茂、南総だけでとらえると、県内でも上位の地域だと考えられるのではないでしょうか。

昨年の暮れにもショッキングなニュースが流れました。経済産業省が「プラスチックやゴムの原料である「エチレン」の20％減産を業界に指示したという報道です。日本一を誇ってきた臨海コンビナートの主力はエチレンです。これの減産ですから、工場の再編を含めて今年から大きな変化が起こるはずです。他にも石油精製メーカーの再編も伝えられています。これまで雇用と税収の多くを頼ってきた京葉コンビナートの工場再編や生産調整が進めば、近年厳しい財政が進む市原市もさらなる財政縮小を考えなければならなくなってくるでしょう。

雇用の場が先細りになると、若者は就職先を求めて大都市へ流出していきます。若者がいなくなれば、子供の数は減る一方。かくして田舎の町は消えていく。そんな構図が見えてきます。

では、大企業の70％が本社を置く世界の都市「東京」はどうでしょうか。東京の出生率は1．09ですから、100人の若者が3代で13人まで減少する計算になります。家賃が高く、地域のサポートが希薄な都市部は　地方に比べて格段に子育てが難しい地域という事を数字が示しています。人口だけで考えれば、減った分を田舎からの流入で賄いながら食いつぶしていくのが、大都市「東京」の実態です。

本には希望が持てる統計も書かれていました。人口減少の流れと反対に、若年女性が増える、あるいは減少がゆるやかな地域がちゃんと存在しています。上位の20を見ると中心都市ではなく、聞いたこともないような町や村の名前が並んでいます。ベットタウンや企業誘致など形は様々ですが、カギを握るのは地域の資源を生かした産業振興を実現して、雇用の拡大や住民の定着を図る、自立した「産業創発型」ではないかと増田氏は書かれています。

人口減少社会は確実に進んでいます。しかし、いたずらに悲観するだけではなく、政治、行政、住民が議論を深め、知恵を絞れば未来は変えられるはずです。逆に言えば、厳しい数字を突き付けられた今ほど、議論と行動をしやすい状況はないはずです。未来を選ぶのは他ならぬ私たちですから。

（大曽根・里山通信員）

魚屋の戯言

カラスミ

読者の皆様、明けましておめでとうございます。

里山通信は平成15年の夏に創刊されて以来、今年で12年目を迎えます。商工会議所の加茂青年部が主体となって新聞を作ってみようという話が出て、魚屋の戯言を書くように言われた時に「3年だけなら」と引き受けたのが間違いでした。約束の3年が経って「終わりにしたい」と申し出ても「そんな約束したっけ?」と一蹴されて終われず、とうとう12年も続いてしまいました。よく扱う魚のことは殆ど書き尽くし、そろそろこのコーナーも終わりにしないといけないなと思ってた時に頂いたのがカラスミです。

当店のお客様の知り合いの方がお仕事で台湾にいらっしゃって、帰国の際におみやげに持って帰って下さったそうです。立派なカラスミを頂いたときは「こんなに高価なものは頂けません」と遠慮したんですが「ウチでは誰も食べないので無駄になってももったいないです。お好きでしたら是非どうぞ」と言って頂いたので飛び上がるほど嬉しい気持ちでありがたく頂戴しました。

カラスミは大変に美味であり、江戸時代から越前の雲丹・三河のこのわたと同列に並んで天下の三大珍味と言われて珍重されていたそうです。カラスミに限らず、日本では魚卵を食べる文化が古くからありますが、食べるまでの手間が大変なのはカラスミが一番でしょう。

原料であるボラの真子（卵巣）から血合いや筋を手作業で根気よく丁寧に取り除き、塩漬け、水洗い、塩抜き、圧搾脱水、乾燥などの手順を繰り返してようやく製品になります。カラスミが他の魚卵に比べて高価なのは手間に対するコストだと思えば納得せざるを得ません。

カラスミと言えば日本や台湾が産地と思われがちですが、実はヨーロッパや中近東など世界各地で作られています。原料の魚もボラだけに留まらず、サワラやタラ、あるいはまぐろを使うこともあると聞きました。魚卵であるにも関わらず、上質のものは生臭さを全く感じさせません。

5mm程の厚さに切ったカラスミを適度に加熱して食べると、ねっとりとした滋味深い味わいが口いっぱいに広がっていついお酒も進んでしまいます。薄切りの大根2枚に挟む方法もありますし、おろしてスパゲティなどのパスタにからめて食べるのもよく知られた料理法ですので、チャンスがあったら是非お試し下さい。

漢字で唐墨と表すのは形が中国の古名である唐の墨に似てることに由来してるのは有名ですが、昔は常温で保存するしかなく、時間が経つと鮮やかな朱色から徐々に黒っぽく変色するからだとの説もあります。近年では干さずにそのまま瓶詰めにした生からすみというものが商品化されてこれも人気があるそうです。簡易に作られた代用品が数多く出回るほど高価で、なかなか手に入りにくい珍味ですが年に一度くらいは楽しみたいと思う正月の魚屋でした。

（鈴木里山通信員）

訂正

前号で紹介した「高滝小の応援歌」に記述ミスのご指摘がありました。お詫び申し上げるとともに、訂正させていただきます。ともに左側が訂正文です。

一　流れも清き養老の　尽きね泉の努力もて
二　流れも清き養老の　尽きぬ泉の努力もて

胸こそ若き身は
胸こそ躍れ若き身は

事務職員募集！

勤務内容　一般事務、会計経理、総会・理事会及び各種会議の開催事務、淡水魚の放流事業、各イベントにて販売補助

応募資格　1名募集（65歳位迄）　簡単なパソコン操作、運転普通免許
就職後、食品衛生責任者資格の受講が可能であれば尚可

勤務地　市原市国本64－1　養老川漁業協同組合事務所

勤務時間　午前9時　～ 午後5時

休日　土日、国民の祝休日、夏季特別、年末年始特別、有給休暇

勤務日　平成27年4月1日より

待遇　厚生年金、社会保険有
給与等詳細は面接にて説明（通勤手当、退職手当有）

応募方法　平成27年2月10日（火）午後5時までに
履歴書（写真添付）を下記まで郵送またはご持参ください。

問い合わせ先

養老川漁業協同組合事務局
〒290－0531　市原市国本64－1
TEL 0436-96-0765　FAX 0436-96-7788

人と環境が一体となって大切な未来へ
自然環境と人間との調和を目指して
杉田建材株式会社
本　社　市原市万田野 26　TEL 0436(96)1311
市原支店　市原市惣社1－1－22　TEL 0436(24)0511
南総支店　市原市牛久450－1　TEL 0436(50)0111
URL http://www.sugita-group.com/

おめでとう！加茂の新成人

平成27年の成人式は　1月11日（日）に市内各会場で開催されました。

加茂地区は例年通り加茂公民館で開催され、新成人は対象者43人のうち、41人が参加。小人数での式典となりましたが、厳粛な雰囲気のなか、門出を祝う心のこもった成人式となりました。特に、今年は会場で見守る親御さんの姿も多く、式典後の記念撮影ではスマートフォンを構える30名ほどの人垣ができるなど、例年にない盛り上がりを見せていました。

（大曽根T里山通信員）

福島にタケノコを！

昨年の4月に里山通信の春号で福島に送るタケノコを募集したところ、150本ほどのタケノコが集まり、集荷したその日のうちに福島のいわき市にもっていって配ることができました。タケノコには長蛇の列ができ、またたく間にさばけてしまいました。結局スタッフの分もなくなり、後日もう一度かき集めて持って行ったくらいでした。

これは五井の有志の会代表の藤田さんの提案と行動によりますが、加茂里山通信もこれに賛意を示し、加茂地区の皆さんに呼びかけるものです。詳細については次号に掲載の予定です。

タケノコは家で食べる量を超えて、ある時期ボコボコ生えてきます。処理に困る場合もあります。加茂地区でそういうタケノコを集めたらすぐに1000本くらいにはなるはずです。今年の目標数をそこに据えて募集をかけたいと思います。多くの皆さんの心意気を期待いたします。

（征矢里山通信員）

市原商工会議所から年頭のご挨拶

明けましておめでとうございます。

旧年中は、格別のご厚情を賜り厚くお礼申し上げます。加茂地域の方々のみならず多くの方々から大変支持されている「加茂里山通信」を、継続して発行されていることに対し、大変な敬意を表す次第です。一愛読者としてこれからも地域の情報をタイムリーに伝え続けていただきたいと思います。

市原商工会議所は、昨年3月から加茂地区を中心に開催されたアート×ミックスに全面的に協力し、加茂地区活性化の一助を努めさせて頂きました。

また昨年4月の消費税率アップ時には、地域経済の冷え込みを最小限に抑え地域経済活性化の起爆剤とするため、「いちはら国府プレミアム商品券」を発行するなど、時宜に応じた取組みを推進して参りました。

未だに厳しい経済環境ではございますが、「いちはLOVEまちの元気づくり運動、みんなで目指そう！景気回復一番のりのまち」をキャッチフレーズに、皆様と共に乗り越え、頼りにされる市原商工会議所を目指してまいりますので、本年も皆様の一層のご支援、ご協力を心からお願い申し上げまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

（市原商工会議所会頭　榊原義久）

宝船プレゼント

今年も読者の皆様に、宝船のプレゼントです。

「大当たり賞」　3名様

「お年玉賞」　7名様

「超目玉賞・福袋」　6名様

計16名様に当たります。

みなさん奮ってご応募ください。

住所・氏名・電話番号と里山通信への**ご意見・ご感想**を添えて**「宝船希望」**と明記してハガキでご応募ください。

290-0081
市原市五井中央西1-22-25
市原商工会議所
「加茂里山通信宝船プレゼント」係まで
締め切りは2月7日（土）　当日消印有効

当選の方には直接ご連絡いたします。

賞品の引き渡し式は
2月15日(日)　午前10時
月崎の商工会議所加茂支部前で行います。
取りに来られない方は無効になりますのでご了承ください。

当選確率はとても高いです
ふるってご応募ください

宝船プレゼントの協賛店・協賛企業は次の通りです。

角屋商店
川口屋
杉田建材
鈴木魚肉店
太陽工業
高山商店
デイリーヤマザキ市原高滝店
田奴久
旅館加茂城

次回は**4月20日**発行予定です。

寒中お見舞い申し上げます

お買い物は地元の商店で！

市原商工会議所
会頭　榊原義久

市原商工会議所加茂支部
支部長　小茶宮夫
役員一同

情報提供、取材依頼はお近くの通信員へ。
メールでも受け付けます。
紙面及び記事に関するご意見、お問い合わせは左記へ。
市原商工会議所
0436（22）4305　担当　河崎
Eメール　kawasaki@i-cci.or.jp

編集後記

・今年は年が明けた日に、庭の早咲きの梅が少し開いているのを見ました。昨年が温かい年だったという影響もあるのかと思いましたが、小さく咲いた元旦の花は幸先がいいなと思うことにしました。例年のように暮れに伝心柱の年久のメンバーと忘年会を行いました。その時は何も言ってなかったのに10日の1月号はまるで高滝特集のように、高滝の記事で埋められていました。どんどん紹介してくれるのは大いに結構、ありがたいと思います。本通信でも、高滝に限らず加茂地区の魅力をもっともっと紹介していこうと思います。住んでいる私たちも案外地元のことを知らなかったり、気が付いていないことがあります。地域の魅力を見直すいいきっかけになればと思います。ところで年が明けると気になるのが昨年9月にまいた菜の花です。今年の出来はどうなのか、昨年種まきに関わった者たちにはとても気がかりです。桜の花とともに見事に咲いてほしいと思います。宝船応募して下さい。そして皆さんの率直な意見をたくさん聞かせていただければと思います。

（征矢里山通信員）

房総・養老渓谷の地酒お土産は

養老渓谷駅前
角屋商店
養老渓谷観光協会窓口
市原市朝生原181
TEL0436-96-1108
FAX0436-96-0052

愛車のある幸せな暮らし

応援します！
安全・安心
有限会社　全日本ロータスクラブ加盟店
小茶自動車
市原市石神227
TEL0436-96-0482
FAX0436-96-1293

皆様と共に歩む観光

ワカサギ釣り最盛期です！
高滝湖観光企業組合
TEL　0436-98-1277